

# 大学の教育改革



糠塚 いそし

昨年末に中教審の答申が公表され、大学入試センター試験にかわる新テストを実施するとともに、「1点刻み」の客観性にとらわれることなく、各大学の個別試験では小論文、面接等を活用することなどが提言されている。これまでセンター試験や個別試験では入学者の知識・技能に関する学力を担保する役割を果たしてきたが、新しい入試では思考力・判断力・表現力等の評価に重点をシフトしようとするものである。答申では高等学校教育改革及び大学教育改革と一体となって進める必要があると述べており、基礎的な知識および技能を基盤として専門性を積み上げている理工系の諸分野にとっては大きな課題となると感じられる。

大学教育改革については以前から様々な取り組みが行われている。筆者もFD (Faculty Development) ワークショップやセミナーに参加する機会が何回もあり、非常に示唆に富むものであった。ただ、表面的な印象を述べさせてもらえば、ポートフォリオ、ルーブリック、アクティブラーニング、PBL等々カタカナ語や略号が重要なキーワードとなっており、門外漢には非常に取っ付きの悪いものでもあった。それでもワークショップの中で行われた医学部学生によるPBL (Problem-Based Learning) 模擬講義や、別の機会に参観した機械工学系学科の講義は印象深いものであった。いずれも自ら設定した課題に少人数のグループで臨み、学生自らの調査や作業等で課題解決を目指すもので、自主的・能動的学習態度の育成に有効であると感じた。また、PBLは少人数で共同作業を行うので、コミュニケーション能力も育成されるという。

分析化学者の役割の一つは課題を発見し、解決に導くことである。企業ではチームとして活動することも重視されるであろう。このため米国で行われたワークショップでは、分析化学教育にPBLを導入することを強く推奨している(藤原鎮男監修、日本分析化学会関東支部訳・編：“分析科学のルネッサンス—問題解決能力を養うカリキュラム改革”(2001)、(学会出版センター))。本書では優れた実践例も紹介されており、PBLをどのように実施するか具体的にイメージすることができる。しかし、正直言って、設備や労力などから見て大きなクラスで実践するには敷居が高いように感じられる。報告の中にあるように新しい教材の開発も必要である。

学生の気質(?)が変わってきているとはよく言われることで、筆者が受け持つ2年生の分析化学実験のクラスでも、グループ内で協力しあうという態度が希薄になっているように思われる。カリキュラムの中に協働的な態度を育成できる新しい教育法を導入すべき時期に来ているのであろうが、実際には基礎的な知識の積み上げを優先させているのが現状である。大学教育改革が謳われてから久しく、すでに優れた実践を行われている方も多いことであろう。「ぶんせき」誌上で先進的な取り組みをご教示いただければ幸いです。

[Isoshi NUKATSUKA, 弘前大学大学院理工学研究科, 日本分析化学会東北支部幹事]